号外
令和８年
〔２０２６年〕

ふたかわ

回覧

呉市築地町３番１号
二川まちづくりセンター
ＴＥＬ２１－３９６１
ＦＡＸ２５－８８２１

～中国放送OBの小沢康甫（やすとし）さんによる講演～

赤のチカラを探るーカープ・モミジの広島から

日時　１１月２３日（月・祝）１３時～１５時
場所　二川まちづくりセンター
定員　３０名（先着）　申込は前日２２日（日）まで
料金　ひとり４００円　　学生・高校生は無料





講師より

「赤のチカラを探る――カープ・モミジの広島から」

広島民俗学会理事　小沢　康甫

講座趣旨

赤ヘルに熱狂する、県の木モミジの紅葉をめでる、宮島の朱の大鳥居を誇る――広島人が、こよなく愛する赤い色です。
赤は祭りや食事、衣服、建物、郷土玩具、街の風景など、そこかしこに使われています。お祝いには、赤と白の紅白が欠かせません。赤鬼・青鬼のように赤は青ともペアを組みます。それぞれの赤の意味が気になります。
広島県内のほか全国各地で撮った写真をふんだんに使って、赤に秘められたパワー、赤が発するメーセージをひもといてみます。
赤に魅せられる広島を起点に、赤が果たす役割を深く掘り下げ、これからの「赤とのお付き合い」を考えてみたいものです。
講座が、ひろしま赤デミー（academy）の一里塚になれば幸いです。

……

小沢　康甫（おざわ・やすとし）略歴

広島民俗学会理事。「左右学」や「瀬戸内の食文化」「瀬戸内の祭り」を軸に執筆・講演活動。広島県大竹市在住。
慶応大学経済学部卒。中国放送に入社。テレビ制作部、報道部、ラジオ制作部など現場を中心に歩む。人事部長、財務部長、報道センター長などを務め、２００７年退職。この間、あいテレビ（松山市）報道制作部長、広島大学総合科学部・非常勤講師を務める。

裏面へ⇒

著書に『暮らしのなかの左右学』（東京堂出版）、『みる　きく　たべる　祭（まつ）－リズム―中四国を歩く』(南々社)、企画・編集・分担執筆に『瀬戸内海事典』（南々社）、分担執筆に「言葉でひもとく　食べものがたり」『中国地域の豊かな食』（中国地方総合研究センター）。



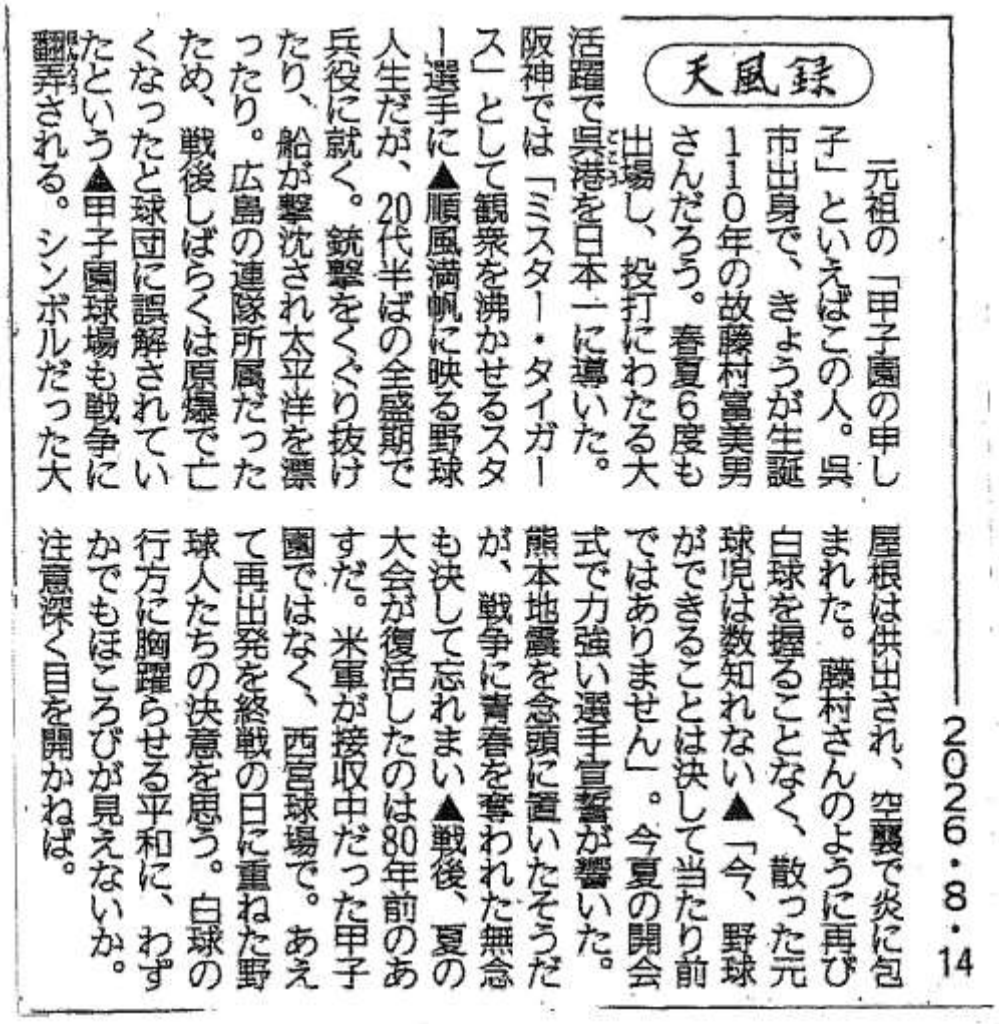
写真左が講師，右は呉市出身元プロ野球選手の藤村富美男さん。

藤村さんをご存じですか？

かつて「甲子園の申し子」と言われ，呉港中学（現高校）を日本一に導き，その後プロ野球阪神タイガースに入団し「ミスター・タイガース」と言われるスター選手となりました。

この写真は，小沢さんが生前の藤村さんに取材したときの写真とのことです。当日は，その時の話も聴けるかも知れません。

ぜひご来場ください。



天風録

元祖の「甲子園の申し子」といえばこの人。呉市出身で、きょうが生誕110年の故藤村富美男さんだろう。春夏6度も出場し、投打にわたる大活躍で呉港を日本一に導いた。阪神では「ミスター・タイガース」として観衆を沸かせるスター選手に▲順風満帆に映る野球人生だが、20代半ばの全盛期で兵役に就く。銃撃をくぐり抜けたり、船が撃沈され太平洋を漂ったり。広島の連隊所属だったため、戦後しばらくは原爆で亡くなったと球団に誤解されていたという▲甲子園球場も戦争に翻弄される。シンボルだった大屋根は供出され、空襲で炎に包まれた。藤村さんのように再び白球を握ることなく、散った元球児は数知れない▲「今、野球ができることは決して当たり前ではありません」。今夏の開会式で力強い選手宣誓が響いた。熊本地震を念頭に置いたそうだが、戦争に青春を奪われた無念も決して忘れまい▲戦後、夏の大会が復活したのは80年前のあすだ。米軍が接収中だった甲子園ではなく、西宮球場で。あえて再出発を終戦の日に重ねた野球人たちの決意を思う。白球の行方に胸躍らせる平和に、わずかでもほころびが見えないか。注意深く目を開かねば。

2026・8・14

中国新聞より